猫のお世話 - また、ホッとしよ。 -

ぱいなっぷる

私は心を閉ざしている。隙間は無い。
「ピーマン。狭い部屋でごめんね」
アパートの一〇二号室は、田んぼの田の字の区切りで四つ部屋がある。田の字の右上が私の寝室。そしてピーマンの寝室でもある。
残暑が落ち着いてきた頃、ピーマンは早朝に私の温もりを求めて、その猫にしては大きな背中を私の肩へ押し当て眠っている。
私の生きがいは、ピーマンのお世話だ。
ピーマンは、突然飛び上がり、いつものように駆け回り出した。しかし、いつもより焦っているピーマンは、閉めていたはずの窓から外へ走り出た。
「ピーマン行かないで」
私は叫び続ける。
「待って。私を置いて行かないで」

体は重たく、追いかけることができない。
大粒の汗が顔や首に筋を作る。
胸が圧迫されるように苦しく、その分だけ心臓が暴れる。
ひどい喉の渇きと蒸し暑さに私は目を覚ました。ピーマンは、キャットタワーの上から私を見つめている。まだ、ぬるい秋の朝の陽ざしに、ピーマンは日向ぼっこをしているのか。それとも私を心配しているのだろうか。私は寝ぼけながら荒い息で、
「ピーマンが迷い猫にならなくて、よかった」
と、自分自身に言い聞かせるように深呼吸をして気持ちを整えようとする。
完全室内飼いのピーマンは、この一〇二号室内の縄張りから外に出れば、迷子になってしまう。
キャットタワーの上のピーマンを見つめて私は、ピーマン、ピーマン、ピーマンと声をかけた。ピーマンは、

「うぉぉ」

と、独特な鳴き声を小さく出すと、キャットタワーから近くのコタツの上へと飛び移った。昔に比べれば年齢からくる動きの重さがあり、大きな体も相まってコタツが大きな音を立てて揺れた。

私も家の事をやろうと思い、疲れている体を動かすため、

「うっ」

という掛け声を出した。

味噌と水を口の中に入れて、飲み込む。昨日買っておいた豆腐をスプーンですくって口に放り込む。これで味噌汁を食べたのと同じだ。

洗濯機をまわし、ピーマンのトイレ掃除をしながらゴミ箱にペットシートや猫砂を捨てるために台所を通る。その時にパンを口で豪快にかじる。ゴミ箱に捨てた後に台所を通るので、水を飲む。そしてピーマンのキャットタワーの

毛玉掃除をする。休むことなく数時間、家事をするのが私の日課だ。夕方に気分転換のため外出した。そして、今日もピーマンとスキンシップや楽しい時間を全く過ごしていないことに気づいて悲しい気持ちになる。これも寂しい私の日課の一つだ。

「ゴメンね。ピーマン」

アパート近くの通りの向こうの夕焼けが、いつものように悲痛だった。

あれ？ピーマン？

山にさしかかる夕日をぼんやり眺めていると、数秒前、いや、だいぶ前にピーマンが宵闇の中を走って通りを横切った気がした。しかし、ピーマンのことを頭いっぱいに考えているから、幻だろうか。

私は不安になり、通りを引き返して、狭い路地の奥をそっとのぞいてみた。家やお店の間に用水路と濃い茶色の土

の道がずっと続いている。生け垣の隙間にピーマンは隠れていないか目を凝らしてみる。真っ白猫のピーマン。模様が一つもない真っ白のピーマン。とても分かりやすいはずだ。自然界、外猫としては圧倒的に不利な純白のピーマン。体も大きいため、すぐに見つけられるはず。

丁寧に店の灰色と生け垣のくすんだ緑を目で舐めるように見たが、真っ白で大きな猫は居なかった。忙しい日々に疲れ、神経質になっていたようだった。緊張の糸が緩み、私は微笑むと、

「もうちょっと待っててね。ゴメンね。ピーマン」

と、一〇二号室で留守番をしているピーマンを思い浮かべ、うぉぉ、という鳴き声や真っ白く大きな体、そして人間の顔にそっくりな面長で彫りの深い顔立ちなどが面白くて、つい口に手を当てて、声を漏らして笑ってしまった。

晩ご飯の食材よりも、ピーマンへのおやつに、何を買お

うか考えながら、通りを歩いて行った。
薄闇に街が明るくなりはじめて、仕事帰りの急ぐ車や学生たちの中、孤独が、冷たく体の芯に触れた。
「ピーマン」
目の前を、大きく真っ白な猫が素早く横切った。私の目に残像として、ピーマンが必死で走っていく瞬間が焼き付いている。
考えるより先に私の体は全力で走り始めていた。あるのは少しの動揺と、圧倒的な覚悟。
私は人目をはばからず、ピーマンと叫びながら走り回った。すると、先ほどの狭い路地へピーマンがゆっくりと入っていく。追いかけていくと、生け垣の奥にある柿の木の途中にピーマンがしがみついている。一〇二号室の縄張りから出てパニックになっているのか、スズメを追いかけて迷子になっているのか。

しかし、不自然なゆがみに私は気づいた。秋風が、そのピーマンと同じ真っ白な、ビニール袋を旗のように、そよがせはじめたのだ。ゆらゆらと、はためいたビニール袋は、強い秋風によって空を飛んで、暗い夜空へ吸い込まれていった。

私は涙を流した。安心したからだ。ピーマンではなくてよかった。

買い物を済ませて、一〇二号室へ入る時、再び緊張した。しかし玄関のドアを開けると、うぉぉ、というピーマンの鳴き声。真っ白で大きなピーマンが、留守番部屋のガラスの向こうで跳ねていた。人間の顔のように面長なピーマンが目を、くしゅとつむって、顔を洗っている。私は荷物をその辺に放り投げると、引き戸を開けて、

「ピーマン」

と抱っこして、落ち着く匂いを思いきり吸い込んで癒さ

れた。
　田んぼの田の字の右上が私の寝室。田の字の左上と右上がピーマンの留守番部屋。左下が台所と玄関で、田の字の右下の部屋はピーマンが出入りできない部屋だ。この右下の部屋で、ピーマンの知らない、とある秘密が少しずつ進んでいるのだ。
　ピーマンは抱っこのしつこさに下りたがっているので、私が「ありがとう」と言うと、ピーマンは「うぉぉ」と鳴き返してくれた。
　床に下りたピーマンは、私の脛に頭を数回当てて足の間をすり抜けて一周すると、田の字の左上の部屋にある窓から外のスズメを狙って伏せをしている。野生の血が騒ぐのだろう。
　私は黒いテーパードパンツの足首の所にびっしり付いたピーマンの白い毛を見て嬉しくなる。

「お守りだ。よし頑張ろう」

夜になり、私は家の事を再開させた。ピーマンの飲み水の交換、ぬいぐるみの洗濯、私とピーマンの食器洗いやピーマンの吐き戻しの掃除。

夜遅くにやっと一、二時間程の私自身の時間が持てるため、食事や風呂、歯磨きなどして深夜に寝室に行く。今夜は甘えん坊ピーマンが布団に来てくれなかった。

朝になると、洗ってから千切っておいたレタスを片手に頬張り、私は急いで身支度をする。今日はパートの日だ。

デパートの清掃をするのに、朝から体は重たく疲れ切っている。汗をいっぱい流したまま一〇二号室から外へ出た。

ピーマンに、行ってくるね、頑張ってくるね、お留守番よろしくね、を言い忘れて少し苛立ちが増した。落ち込むほどの罪悪感だ。

「おはようございます。大丈夫ですか」

急に背中へ声をかけられ、振り返ると、アパートの隣の部屋に住んでいる一〇一号室の苦手な男性が眠たそうに、だらしなく佇んでいた。私は、

「すみません。暑いですから汗が止まらなくて」

と作り笑いで答える。その男性は欠伸をしながら、

「いえ、汗はいいんですが、こないだの夜、ピーマンピーマンって走ってられたので。なんというか、大丈夫かなと」

私は胸が大きく一打ちし、熱い脂汗がどろどろ出てきた。私は思いきり笑顔を作り、

「特売日、だったんです」

と言ったとき、顔からしぶきが霧状に飛び散った。

「だからあんなに真剣な顔をしてたんですね」

男性は、納得したように頬を掻いている。無精ひげのじゃりじゃりという気味悪い音が耳障りだ。

「ピーマン安いの買えましたか」
「私。仕事なので」
これは失礼失礼、という年齢不詳の男性の声がすぐに遠くなる程の急ぎ足でパートに向かった。
「矢間さん！遅刻ばかりじゃ困りますよ」
と班長から叱られて、
「矢間さんボーっとして手すり拭き忘れてましたよね」
と退勤の時も叱られた。
ピーマンに早く会いたい。
私は一〇二号室の、玄関を開けた。留守番部屋のガラスに真っ白いピーマンが香箱座りをしているのが見えた。今朝私はピーマンに、行ってきます、と言い忘れたから、
「ただいま！ピーマン！」
と靴を脱ぎ捨て引き戸を開けた。ピーマンは私を見上げて目をきゅっ、きゅっとさせていた。

「ピーマン。ピーマン」

私はピーマンを抱き上げて、頭の匂いを思いきり吸い込んだ。パートの疲れが消えていく。

そして、家の事が始まる。掃除機や洗濯機、トイレや風呂場を掃除して、室内物干しの洗濯物をたたむ。

今日も気がつけば深夜になっていて、ピーマンが田の字の左上の部屋で寝っ転がりながら外を眺めている。私はそっと、秘密の田の字の右下の部屋の中に、買っておいた木材を運び込んだ。

次のパートのシフトからして、朝起きた時から一日中、家事ができるため、普段より少し落ち着いて布団を整えて寝始める事ができた。

すると、一〇一号室から大きな物音がした。一回だけではない。ガサガサと物がすれる音や、トントン何かを叩く音、人間のうめき声もする。ピーマンがキャットタワーの